

## 白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

丹羽博之

『白氏文集』が平安文学に与えた影響の数々についてはすでに数多くの言及があり、改めてその広範囲な受容に驚きを禁じ得ない。ところが、白居易と彼を慕った平安人との生涯や人生観、文学観はかなり異なるものである。平安文学における受容の質を検討していくと皮相な面でのみ平安人は白詩を受容している点が多く見られ、彼我の文学の違いも見受けられる。本稿では平安朝漢詩が白詩から学んだと考えられる「提壺鳥」の詩を手掛かりに、白樂天の文学と平安朝漢詩とを考察したい。

一

初めて提壺鳥という鳥を知ったのは小島憲之先生の監修の下で『田氏家集』の注釈作業中、次の詩を担当したときであった。

148 三月三日侍於雅院賜侍臣曲水之飲 應製

三月三日、雅院に侍り、侍臣に曲水の飲を賜ふ。應製

大皇歳久廢良辰 大皇歳久しく 良辰を廢し

聖主初臨元巳新 聖主初めて臨みて 元巳げんし新たなり

宮水自流為曲洛 宮水自ら流れて 曲洛きょくらくと為り

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

内臣便引作賓客 内臣すなはち引きて 賓客と作る

提壺鳥舌催呼酒 壺をひま提ぐる鳥舌は 催して酒を呼び

帶綬花心笑向人 綬をじゆ帯ぶる花心は 笑みて人に向かふ

莊叟莫嫌漆園吏 莊叟さうそう嫌ふこと莫かれ 漆園しつゑんの吏たるを

明時還侍泛觴春 明時ま還た侍らむ 觴さつを泛かぶる春に

(『田氏家集』卷下。本文は小鳥憲之監修『田氏家集注』和泉書院による。)

この「提壺」について、『田氏家集注』では「提壺鳥のこと。提壺蘆とも。鳴き声を表音化した鳥の名。酒壺を提ぐことから酒を連想させる。」「白居易以前の例は未見。白居易の例を念頭において使ったか。」と説明した。

この提壺鳥は『漢語大詞典』の「提壺」の項目では「亦称『提壺蘆』、『提壺蘆』。鳥名。即鵜鷓。唐劉禹錫《和蘇郎中尋豐安里旧居寄主客張郎中》『池看科斗成文字、鳥聽提壺憶獻酬』(以下略)」との説明があり、提壺鳥とは鵜鷓(がらん鳥、ペリカン)のこととする。提壺(tinā)と鵜鷓(tinā)という同じ発音からの連想によるものである。提壺||鵜鷓||ペリカンならば、ペリカンの嘴の下の大きな袋は物を入れ、運ぶことを容易に連想させる。そして発音の類似から運ぶものが壺となり、提壺鳥が生まれたのであろう。このように、発音の連想とともに形状の連想から、鵜鷓||提壺鳥の関係ができたのではないか。ちなみに、『説日本鳥名由来辞典』(菅原浩・柿澤亮三・柏書房)には次のように説明されている。

提壺【未詳】

清の余曾三の「百(花)鳥図」の提壺の図は不正確であって種名を判定できない。

鵜鷓【ハイイロペリカン】

清の余曾三の「百(花)鳥図」の鵜鷓の図はハイイロペリカンである。わが国では、奈良時代から、鵜鷓、または鵜を「う」としてきたが、これは誤りで、鵜鷓は「がらんてう」(ペリカン)であり、「う」は鵜鷓である。

提壺鳥の用例は、白詩に次の二例が挙げられる。

早春聞提壺鳥、因題隣家 早春提壺鳥を聞き、因て隣家に題す

厭聽秋猿催下淚 聴くを厭ふ 秋猿の下涙を催すを

喜聞春鳥勸提壺 喜び聞く 春鳥の提壺と勸むるを

誰家紅樹先花發 誰が家の紅樹ぞ 先づ花発く

何處青樓有酒沽 何處の青樓か 酒有つて沽る

進士麤豪尋靜盡 進士の麤豪は 静を尋ねて尽きぬ

拾遺風彩近都無 拾遺の風彩は 都なるに近きや無や

欲期明日東林醉 明日 東林に酔ふことを期せんと欲し

變作騰騰一俗夫 變じて騰騰たる一俗夫と作る

〔卷十六・0926 元和十一（八一六）年四五歳、江州（白氏文集の本文は那波道円活字本による。詩番号、年齢推定は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』による。〕

まず、この詩について考察する。白居易は元和十年秋八月、時の宰相武元衡暗殺事件の上疏がたたり、江州司馬に左遷される。自ら正し  
いと信じて行つたことが通らず、逆に当局から忌避される事態となり、憤懣やるかたのない彼は「草草辞家憂後事、遲遲去国問前途」（「初  
貶」官過「望秦嶺」15-0863）の詩を遺して都長安を後にする。三年間の配所での生活により、彼の人生観、文学観は大きく変化する。すなわ  
ち、身は諫官として兼済・治国平天下の姿勢から知足安住・独善の境地を求める生活態度への変身、諷諭詩から閑適詩への変化である。そ  
うした時期にこの提壺鳥の詩が詠まれていることに注目したい。昨秋、江州左遷時には悲しみを催す猿の声を聴くのでさえいやであったが、  
春の鳥（提壺鳥）が酒を勧めるかのように聞こえるのは嬉しい。と詠み出し、左遷直後の悲しみが、春になりすこしは和らいだ印象を与え  
る。さらに頸聯では「進士のころの豪放さはなくなり、左拾遺のときの風采も見る影もないだろう」と江州司馬の身分もすっかり板につい  
て来たという。次の尾聯では「欲期明日東林醉、變作騰騰一俗夫」とかつての新進気鋭の官僚としての意気込みもなくなり、「一俗夫」とな  
ったことを自嘲を込めてうたう。ここにはやや誇張が感じられるが一半は彼の偽らざる心境であろう。その俗夫として面が「早春聞提壺鳥、

因題隣家」という愉快な詩題となり、詠ずるうちにふとおのが真情も吐露されたのではないか。彼が目指し、自負した新樂府五十首等の諷諭詩の世界とは大きく異なつて来ている。

ここで、なぜ提壺鳥が江州で詠まれたかについて考えたい。提壺といえは、まず、陶淵明の詩

提壺接賓侶 壺を提<sup>ひき</sup>げて賓侶<sup>つら</sup>を接ね

引満更獻酬 満を引<sup>ひ</sup>きて更<sup>こも</sup>ごも獻酬す

〔遊斜川〕『靖節先生集』卷二

提壺挂寒柯 提<sup>さ</sup>げたる壺<sup>さむ</sup>を寒柯<sup>か</sup>に挂け

遠望時復為 遠望を時に復た為す

吾生夢幻間 吾が生は夢幻の間

何事繼塵羈 何事ぞ塵羈<sup>じんき</sup>に繼<sup>つな</sup>がる

〔飲酒二十首（其八）〕同卷三

が想起される。飲酒詩人として名高い陶淵明は江州の廬山に帰隠し、多くの田園詩を詠じている。白楽天はその旧宅を廬山のふもとの柴桑、栗里に訪問し、「訪陶公旧宅」并序 07-0278」をものしている。その中で

昔嘗詠遺風 昔嘗て 遺風を詠じ

著為十六篇 著はして 十六篇を為す

今來訪故宅 今來りて 故宅を訪へば

森若君在前 森として 君前に在るが若し

（中略）

每逢姓陶人 姓は陶なる人に逢ふ毎に

使我心依然 我が心をして依然たらしむ

と詠み、陶淵明の遺風を追慕している。陶淵明の詩が無くとも、提壺鳥という名だけで十分感興を催すことではある。しかし、以前から慕っていた詩人の飲酒詩に登場する提壺からも、同じく飲酒詩人を自負する白樂天は当地の提壺鳥に興味を覚えたのではないだろうか。彼が江州で次第に人生観、文学観を変えて行つた背景には陶淵明の生き方、遺風もあずかつていたであろう。また、江州左遷時に次第に酒にのめり込み、飲酒詩に新境地を開いた印象を受ける。特に「飲酒二十首（其八）」の「吾生夢幻間、何事繼塵羈」はその後の白樂天の生き方と重なるが、これについては後で考えたい。

白樂天は、江州に来て提壺鳥というものを知り、初めてその鳴き声を聞いたのではないかという印象を持つ。一つの理由は鶻鵞（提壺鳥）は中国の南方を主な生息地としていることである。『漢語大詞典』の「鶻鵞」には

亦作「鶻胡」。水鳥、体長可達二米、翼大、嘴長、尖端弯曲、嘴下有一个皮質的囊、羽毛灰白色（中略）善于游泳和捕魚、捕得的魚存在皮囊中。多群居在熱帶或亞熱帶沿海（以下略）。

とある。河南の鄭州に生まれ、都長安周辺で暮らすことの多かった白樂天は熱帯、亞熱帯に群居する鶻鵞（提壺鳥）を實際に目にする機会は少なかつたはずである。敬慕する陶淵明の飲酒詩に登場する提壺を連想させる提壺鳥を江州に来て初めて聞き、一入耳を傾けたのではないだろうか。異国の珍しい風物に接して感興を催し、それを詩歌を詠むということは古今によくあることである。

次に、白詩のもう一例の提壺鳥を挙げる。

#### 寓意五首（其三）

促織不成章 促織そくしよく 章を成さず

提壺但聞聲 提壺 但だ声を聞く

嗟哉蟲與鳥 嗟哉ああ 虫と鳥と

無實有虛名 実無くして 虚名有り

與君定交日 君と 交はりを定むる日

久要如弟兄 久しく弟兄の如きを要す

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

何以示誠信 何を以てか 誠信を示さん

白水指為盟 白水 指して盟を為す

雲雨一為別 雲雨 一たび別れを為さば

飛沈兩難并 飛沈 両つながら并せ難し

君為得風鵬 君は風を得たる鵬と為り

我為失水鯨 我は水を失へる鯨と為る

音信日已疎 音信 日に已に疎に

恩分日已輕 恩分 日に已に輕し

窮通尚如此 窮通も 尚ほ此くの如し

何況死與生 何ぞ況んや 死と生と

乃知擇交難 乃ち知る 交はりを択ぶことの難きを

須有知人明 須らく人を知る明の有るべし

莫將山上松 山上の松を將て

結託水上萍 水上の萍に結託すること莫かれ

[卷11・0092 元和二、十三(八一八)年]

提壺鳥は詩の冒頭に促織と対にして詠まれている。詩は、促織や提壺鳥とともに有名無実の譬えとし、交友を結ぶには山上の松の如き操を持つことが肝要であることを寓意する。なお、佐久節氏訳註『白樂天全詩集』は【字解】では「提壺 鳥の名。」としながら、【詩意】では「提壺といふ蟲は鳴き声をきくばかりで壺を提げるわけではない。」とされるのは単純な勘違いであろう。この詩の詠作年次は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』、下定雅弘氏『白氏文集を読む』はともに元和二、十三(八一八)年とする。寓意詩五首に底流する思いは作者の江州左遷の経験や挫折感があつてのように私には読める。例えば、寓意詩(其一)では

地雖生爾材 地爾の材を生ずと雖も

天不與爾時 天爾の時を与へずんば

不如糞土英 糞土の英の 猶ほ人の之を

猶有人掇之 掇る有るにしかず

已矣勿重陳 已めよ重ねて陳ぶる勿れ

重陳令人悲 重ねて陳ぶれば人をして悲しましむ

不悲焚燒苦 焚燒の苦を悲しまず

但悲採用遲 但だ採用の遲きを悲しむのみ

と詠む。特に「地雖生爾材、天不與爾時、不如糞土英、猶有人掇之」に左遷の経験が活かされているように読める。また其二では

佩服身未暖 佩服 身未だ暖ならざるに

已聞竄遐荒 已に遐荒に竄すと聞く

親戚不得別 親戚も 別るるを得ず

吞聲泣路傍 声を吞みて 路傍に泣く

賓客亦已散 賓客も 亦た已に散じ

門前雀羅張 門前雀羅張る

地位の転変の儂さ、早々と都を去って行く描写は江州左遷時の経験「草草辞家憂後事」や「走馬至滄水、纔及二執手。憫然而訣、言不及他。」（「與楊虞卿書27-1483」）が重ねられているのではないか。流謫地で長安での住居が荒れ、かつての賓客たちも雲散霧消したことを伝え聞いたことであろう。前掲其二でも「君為得風鵬、我為失水鯨、音信日已疎、恩分日已輕」と得意と失意で友情も手のひらを返すように失せてしまったことを嘆くのも、江州での経験があつたのことも読めよう。白樂天は江州で、かつての都の友人とも疎遠になった経験を次のように詠んでいる。

白楽天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

北省朋僚音信断 北省の朋僚は 音信断え

東林長老往還頻 東林の長老は 往還頻りなり

〔閑意 17-1042〕 元和十二（八一七）年四六歳

其四、五も江州左遷時の経験が背景になっているとも読めるが其一、二、三ほどではない。詩の内面による推定で異論もあるが、私には一度挫折を味わった者の手を翻すかのように冷たくなった友人や世間に対する批判めいたものを感じる。寓意五首は新樂府五十首、秦中吟十首に比べ、諷諭精神の希薄さが感じられ、かつての情熱的な意気込みよりも、むしろ一步身をひいて醒めた目で寓意しているように私には読める。それは「寓意」という詩題に端的に表れている。

さらに、寓意詩其三で提壺鳥がいささか突然に促織と対で登場するのも江州での見聞、新知識をひけらかそうとする詩人の創作意欲の表れではなかったか。以上薄弱な根拠ではあるが、寓意詩五首は江州左遷後現地での体験を踏まえて詠まれた可能性が高いと考えられる。

二

『田氏家集』が学んだと考えられる白詩の提壺鳥を考察したが、次に中国詩における提壺鳥の例を考察する。『田氏家集注』では「白詩以前の用例未見」としたが、その後に見つけ得た例の中で最も古いものは唐の崔國輔（生没未詳。開元十四（七二六）年の進士。）の「対酒吟」である。

行行日將夕 行き行きて 日將に夕べならんとす

荒村古塚無人跡 荒村古塚 人跡無し

蒙龍荆棘一鳥吟 蒙龍荆棘もうろうけいさく 一鳥吟いっせう

屢勸提壺沽酒喫 屢しばしばば提壺と勸め 酒を沽かひて喫せよと

古人不達酒不足 古人 酒の足らざるを達せず



遺恨精靈傳此曲 遺恨の精靈 此曲を伝ふ

寄言世上諸少年 言を寄す 世上の諸少年

平生且盡盃中綠 平生且つ尽くせ 盃中の綠

(唐詩は『全唐詩』によった。以下同じ。)

崔國輔は吳郡(江蘇省)または山陰(浙江省)の人といわれ、長江流域の出身である。南方によく生息する提壺鳥(鶉鴒)も日常親しく接していたのではないか。それが「対酒吟」という酒を主題とした詩に詠まれたのであろう。今のところ崔國輔以前の詩人に例を見いだせないが、白樂天より五十年ほど前の詩にわずかに一例見られるが白詩との影響関係は不明である。

崔國輔の例は詩題が示す如く、酒をテーマにした伝統的な飲酒詩である。白詩の「早春聞提壺鳥、因題隣家」は提壺鳥の鳴き声を契機として己が閑適のさまを述べるのが主題になっており、日常の些事を滑稽味を交えて詠んでいるのが特色である。身辺の取りとめもない事柄を詩に詠むという中唐、晩唐から宋詩にかけての詩風の一端がうかがわれる。

次に挙げられる例は、前掲『漢語大詞典』も挙げる劉禹錫の「和蘇郎中尋豊安里旧居寄主客張郎中」の七律であろう。白樂天と同年の生まれで、晩年には『劉白唱和集』を交わし、それぞれ影響しあつた詩人の詩に登場することに興味を覚える。

和蘇郎中尋豊安里舊居寄主客張郎中 蘇郎中の豊安里の旧居を尋ね主客張郎中に寄するに和す

漳濱臥起恣間遊 漳濱しやうひんに臥起し 間遊まゆうを恣ほしひままにす

宣室徵還未白頭 宣室せんしつより徵還ちゆうかんするも 未だ白頭ならず

旧隠来尋通德里 旧隠来たり尋ぬ 通德里

新篇写出畔牢愁 新篇写し出す 畔牢愁はんろうしう

池看科斗成文字 池には看る 科斗かふとの文字を成すを

鳥聽提壺憶獻酬 鳥には聴く 提壺の献酬を憶ふを

同学同年又同舍 同学同年 又た同舍

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

許君雲路並華輦 君が雲路にて華輦を並べんことを許さん

白詩と劉禹錫の詩の先後関係について考察する。白と劉は晩年になって急速に親交を深めていったが、それまでは異なる人生を歩んで来た二人であった。劉は若き日、貞元二一（八〇五）年に王叔文の所謂八司馬事件に連座し、朗州司馬に左遷され、以後も連州、和州等の地方官を歴任し、ようやく都長安へ帰って来たのは太和二（八二八）年であった。その年に主客郎中に除せられ、翌年には礼部郎中に移っている。ところが、太和五年にまた蘇州刺史に転じ、ついで汝州、同州刺史に任じられている。開成元（八三六）年には同州刺史をやめて太子賓客として洛陽に移り住み、以後会昌二（八四二）年七月に没するまで洛陽を住家とした。劉の「和蘇郎中尋豊安里旧居寄主客張郎中」の詩題から太和二―五年の主客、礼部郎中職にあつて長安在住の時に詠まれた可能性が高い。すくなくとも、長安に戻ってくる前の地方官の時代に詠まれたとは考えにくい。白詩の提壺鳥の詩は元和十一（八一六）年には詠まれているので、白詩の方が先と考えてよいだろう。白と劉が交流を深めて行くのは劉が開成元年に洛陽に移り住んでからのことではあるが、この提壺鳥の詩は白詩から学んだ可能性もある。

このほか、李頻（大中「八四七―八六〇」の進士）の「送陸肱歸吳興」に

勸酒提壺鳥 酒を勧む 提壺の鳥

乗舟震澤人 舟に乗る 震沢しんたくの人

南方の呉興に帰る友人を送る詩に登場し、提壺鳥が南によく生息していることをうかがわせる。

また韓握（八四四―九二三）の「村居」に

日照神堂聞啄木 日は神堂を照らし 啄木を聞き

風含社樹叫提壺 風は社樹を含み 提壺叫ぶ

とある。「村居」の詩題からも、都長安周辺よりは田舎に棲む鳥であることを示しているよう。

次に宋詩の例を挙げると

王禹偁（九五四―一〇〇二）の「初入山聞提壺鳥」詩に

遷客由来長合醉 遷客は由来 長く合あはに酔ふべし

不煩幽鳥道提壺 煩はず 幽鳥の提壺と道ふに

がある。王が白詩から影響を受けたことについては、吉川幸次郎氏も述べられている（『宋詩概説』岩波書店）。また、『中国の名詩鑑賞』宋詩附金（内田泉之助監修、佐藤保編。明治書院）の王禹偁の作者小伝には「宋初、形式主義的な西崑体の華麗な詩風が一世を風靡する中で、杜甫と白居易に学んで現実的な新しい詩風を開き、宋詩独自の世界の先駆的役割をはたした詩人である。」と解説されている。「杜甫と白居易に学んで現実的な新しい詩風を開き」とあるが、白樂天の現実的な詩風も学んだであろうが、詩語の面でも影響を受けたのではないだろうか。

杭州の西湖畔の孤山に隠棲し、梅を愛し、鶴をめたので梅妻鶴子と称された林逋（和靖、九六七―一〇二八）も

青山連石埭 青山 石埭に連なり

春水入柴扉 春水 柴扉に入る

多謝提壺鳥 多謝す 提壺鳥

留人至落暉 人を留めて 落暉に至るを

（『上湖間泛二艤一舟石壺二、因過二下湖小墅一』、『林和靖先生詩集』卷一四部叢刊本による。）

方塘波緑杜衡青 方塘波緑に 杜衡青く

布穀提壺已足聽 布穀提壺 已に聴くに足る

（『山中寒食』同卷四 布穀は布穀鳥のこと）

の二例の提壺鳥の詩を残している。僅かに三百余首しか収められていない『林和靖先生詩集』に二例も詠まれていることは注目してよい。杭州刺史として赴任し、西湖を愛してやまなかった白樂天の影響が考えられる。<sup>注</sup>この例も提壺鳥が南方の春の鳥で西湖すなわち水辺に生息していることを示しているよう。

次に、蘇東坡の「攜二妓樂一、游二張山人園一」（『蘇東坡詩集』卷十六）の詩を挙げる。

大杏金黃小麥熟 大杏金黃小麥熟し

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

墜巢乳鵲拳新竹 巢を墜とす乳鵲 新竹を拳す

故將俗物惱幽人 故らに俗物を將て 幽人を惱まし

細馬紅粧滿山谷 細馬紅粧 山谷に滿つ

提壺勸酒意雖重 提壺酒を勸め 意重しと雖も

杜鵑催歸聲更速 杜鵑歸るを催して 声更に速かなり

酒闌人散却關門 酒闌はにして人散じ 却つて門を闕ぢ

寂歷斜陽挂疎木 寂歷斜陽 疎木に挂る

蘇東坡は二度にわたって杭州に赴任し、美しい西湖を愛した。彼は白樂天がしたように西湖の管理、改修にも心を砕き、今に残る名高い蘇堤を残している。蘇東坡も西湖を詠じた多くの詩を残しているが、彼は白樂天の人となりや彼の文学をこよなく愛し、多くの髮響を受けている。この提壺鳥も恐らくは、白詩から学んだものであろう。

南宋の詩人を代表する陸游も

提壺言語開顏聽 提壺の言語は 顔を開けて聴き

斲木衣襦緩歩窺 斲木の衣襦は 歩を緩めて窺ふ

〔「山園」〕『劔南詩稿』卷二十八 陸游の例は小田美和子氏よりご教示を受けた。〕

提壺勸客飲 提壺は 客に飲を勸め

架犂課農畊 架犂は 農に畊を課す

〔「感物」〕同卷七十六

の二例の提壺鳥を詠んでいる。白詩との関係は速断はできにくいものの、後述する如く白詩に十二例も詠まれた白樂天特有の卯酒の詩も陸詩に数例見られることから、この提壺鳥も白詩からの影響が考えられる。

このほか、歐陽修「独有花上提壺蘆、勸我沽酒花前醉」〔「啼鳥」〕、梅曉臣「提胡蘆、提胡蘆、爾莫勸翁沽美酒」〔和「永叔六篇・啼

鳥」、黄山谷「提壺猶能勸<sub>レ</sub>沽<sub>レ</sub>酒、黄口只知貪<sub>二</sub>飯顆<sub>一</sub>」（「演雅」）などが宋代の例として挙げられる。

三

次に平安朝漢詩における提壺鳥の例を考察する。冒頭に掲げた島田忠臣の詩は春三月三日の宮中の雅院での晴れの場での作であった。侍宴詩であり、提壺鳥は曲水宴での流杯からの連想で詠まれている。侍宴詩ということでおのずから制約があり、聖主の治世を賛美する内容となっている。当時の流行の白詩語を出典とすることによって侍宴詩らしい由緒正しき詩となり、多少の諧謔味を帯びながらも華やかな詩となっている。その意味では成功作と言えよう。しかしながら後述するように白詩の世界とは別次元の内容ではある。この忠臣の詩が調査した中では本邦最古の例である。

先日ふとした偶然からもう一例の提壺鳥に出会った。京都国立博物館において「宮廷の美術」（会期一九九七年四月十五日～五月十八日）見学の際、「伏見天皇宸翰屏風土代臨模」の尾聯に「空勸提壺不勸盃」云々の詩句を持つ漢詩があった。高鳴る胸を押さえつつ、持っていた新書本の裏表紙に数箇所不明の字があったが書き取り、凶録を買って家路を急いだ。帰宅後早速調べると、「御物小野道風筆屏風土代」を伏見天皇（一二六五～一三一七）が模写したもので、その屏風詩は「延長六年十一月内裏御屏風詩 尋春花 大江朝綱朝臣」であった。全詩を掲げると

見説林花処々開 見る説らく 林花処々開くと

晨興並馬共尋来 晨興馬を並べて 共に尋ね来たる

青絲縵出陶門柳 青絲縵り出だす 陶門の柳

白玉装成庾嶺梅 白玉装ひ成る 庾嶺の梅

香迸宜張雙袖受 香迸りては 宜しく双袖を張りて受くべし

葩勻偷折一枝廻 葩勻ひては偷かに一枝を折りて廻る

白楽天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

翻嫌春鳥欺遊客 翻かへつて嫌ふ春鳥の遊客を欺き

空勸提壺不勸盃 空しく提壺と勸むるも盃を勸めざることを

(六句目は「葩勾」とあるが改めた)

頷聯の佳句は『和漢朗詠集』(巻上・梅)、『和漢兼作集』(巻一・春部上)にも収められている。また、この土代は川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究(上)』の巻頭口絵写真に掲げられている。本稿では、その写真に基づいて掲載した。頷聯、頸聯で尋ねた春の花の素晴らしさを遠景、近景を織り交ぜながら視覚的、嗅覚的に描写し、色対や数対を用い、陶門柳、庾嶺梅の故事をも踏まえ、美しいみごとな対句を構成している。そのように春景色を賛美しながらも尾聯においては聴覚を用いて「春の鳥が提壺と酒を勸めるかのように鳴くが、それは声ばかりで実際には盃を勸めることがないのはかえって厭わしい」と結ぶ。終わりの尾聯での機知、落ちのきいた詩で朝綱の詩才をよく示しており、平安朝漢詩としては成功した作と言える。その故に内裏屏風詩として採用されたのであろう。朝綱が白樂天に傾倒していたことは『古今著聞集』などに逸話が残るが、この詩の提壺鳥も白詩を学んだものと考えられる。

次にもう一例、平安朝漢詩の中で目に止まった詩を挙げる。

春日城北幽庄言志 春日城北の幽庄にて志を言ふ

藤原周光

春光細膩感千般 春光さいい細膩として 感おもひ千般

謝遣喧々毀誉班 謝遣す喧々たる 毀誉あまねの班あまねきを

最北辺東華殿旧 最北辺の東 華殿くわきやう旧り

□東里北竹窓閑 □東里の北 竹窓閑かなり

多年締契交如水 多年契りを締ぶ 交はり水の如く

近日待花意在山 近日花を待つ 意山に在り

鳥勸提壺声尚妄 鳥は提壺と勸めて 声尚みだほ妄りがはしく

柳垂緘黛手応攀 柳は緘せんたい黛を垂れて 手応に攀よづべし

十分飛盞宜催醉 十分の飛盞は 宜しく酔を催すべく  
五両落帆莫早還 五両の落帆は 早く還へること莫かれ  
後会難知何再日 後会は知り難し 何れの再日ぞ  
若分銅虎越雲関 若し銅虎を分かつたば、雲関を越えん

(『本朝無題詩』 卷六 本文は本間洋一氏『本朝無題詩全注釈』による。訓みは一部変えた。)

『本朝無題詩全注釈』では、

○鳥勸「柳絮送人驚勸酒」(三月二十八日贈周判官)、「声々勸酔応須酔」(三月晦日晚聞鳥声)などと、白楽天も鳥が鳴いて酔いを勧めると詠んでいる(下記注参照)。○提壺 酒壺を腰に下げる。飲酒。「厭聴秋猿催下涙、喜聞春鳥勸提壺」(白楽天「早春聞提壺鳥因題隣家」)

と白詩から学んだ表現であることを指摘されている。ただし、提壺が提壺鳥という具体的な鳥の名に基づくことを明確に説明されず、「試訳」にも「鳥は酒を飲めというばかりにやたらに啼くし」と提壺鳥の名前の持つ面白さが訳に活かされていないのは残念である。提壺鳥はその名前の如く酒壺をひっさげて来て飲めとやたらに啼いて勧めるという意味であろう。

以上の三例を平安朝漢詩の中に見出した。次に平安朝漢詩と白詩との関係を考えると、忠臣の例は、初見であるから白詩を学んだものである。朝綱詩の「翻嫌春鳥欺遊客、空勸提壺不勸盃」、周光詩の「鳥勸提壺声尚妄」と白詩の「喜聞春鳥勸提壺」の類似からも朝綱、周光は忠臣から学んだのではなく、白詩から直接得たものであることが看取される。また、三者とも提壺鳥が春によく鳴くことも知っていたようである。

島田忠臣、大江朝綱、藤原周光と平安前中後期のそれぞれの時代を代表する漢詩人によって提壺鳥の詩は詠まれていることは興味深い。提壺鳥といういかにも詩心を誘う題材に平安漢詩人も注目し、機会あらば詠もうとしていたのである。それが、忠臣の「三月三日の雅院での侍宴」、朝綱の「内裏屏風詩」という晴れの場で披瀝されることによって、より効果的に印象づけられたであろうし、詩人としての力量も示せ、名声も博したのではないか。平安詩人たちの『白氏文集』の読みの深さ、白詩語に対する嗅覚のするどさに改めて驚嘆の念を禁じ

得ない。しかしながら、白詩は「変作騰騰一俗夫」と諧謔を交えながら己が心情をさらけ出し、詩を友として楽しむ、詩を詠むことを心底愛していることが読者にもひしひしと伝わってくる作品である。白俗と呼ばれるかも知れないが、自らの真情を飾らずに素直に吐露しており、いかにも白樂天の手柄が滲み出ているような詩である。一方、忠臣、朝綱の詩は晴れの場での作らされた詩であるという点でも両者の根本的な相違がある。白樂天の「早春聞提壺鳥、因題隣家」詩は閑適、脱俗の詩であり、「変作騰騰一俗夫」という雅に反する内容の詩である。「寓意五首」も反権力、体制批判的な内容の詩である。ところが、忠臣、朝綱の晴れの場での詩は雅びが最も要求される。そして、二人の詩は実に華やかでみごとにその役目を果たしている。その詩に白詩の提壺鳥が詠まれていることは両者の相違を端的に示している。平安朝の漢詩人達は「早春聞提壺鳥、因題隣家」「寓意五首」詩を詠んだ白樂天の意図が奈辺にあったかなどはおかまいなしに、白詩の中で興味を誘う詩語をことばのレベルだけでの撰取に終始している。しかし、平安漢詩人達は白詩語を己が詩囊に蓄え、自家薬籠中のものとし、晴れの場での詩作に巧みに取り入れて成功しているといえよう。白詩の世界とは全く別の平安朝漢詩の世界が構築されていた。それは、美しくはあるが空虚な詩句を並べただけという側面を持つ世界でもあった。

酒に関するよく似た受容の例として卯酒（卯の刻、午前六時から飲む朝酒）との関連を考えたい。先に「白樂天の卯酒の詩と平安朝漢詩」（大手前女子大学論集第三十号・一九九七年二月）という論文において白詩に十二例も見られる卯酒の詩が宋の蘇東坡、陸游にも詠まれ、平安朝においても島田忠臣、紀齊名、藤原周光らによって詠まれたことを考察した。卯酒・提壺鳥という飲酒の新しい詩材二つを白詩から学んだと考えられる詩人は、中国では蘇東坡・陸游であり、平安朝では島田忠臣・藤原周光である。蘇東坡が白樂天を敬慕していたことは知られているが、島田忠臣・藤原周光といった異国の平安漢詩人も白詩の特徴的な二つの詩語を己が詩に詠みこんでおり、その傾倒ぶりが窺えるとともに、彼らの白詩の読みの深さに感動を覚える。白樂天の江州左遷期の詩を多く収める『白氏文集』巻十六・十七は日本ではもともとよく読まれた巻であるが、卯酒、提壺鳥の語もこの両巻に登場する。

卯酒・提壺鳥という飲酒に関する詩が江州左遷時において初めて詠まれたことは白樂天の文学、人生の変化を考える一つの鍵になる。江州において白樂天は「兼濟」から「独善」への変化があったと言われるが、卯酒、提壺鳥という飲酒に関する面白い詠み方は独善の世界へ



誘うものであろう。提壺鳥の詩は酒を飲む理由づけのようなユーモラスな面もあるが、卯酒の詩になると仕事からの解放感がうれしげに詠まれ、朝の六時からの酒ということで退廃的な面も生じてこよう。不満、鬱憤を晴らす具として酒の力を借りるといふのは古今において同じであろうが、白楽天も江州においてよく酒を飲んだ。文学的誇張もあろうが、あびるように苦い酒を飲んだことを次のように詠う。

若不坐禅銷妄想 若し坐禅して 妄想を銷さずんば

即須吟醉放狂歌 即ち須らく吟酔して 狂歌を放にすべし

〔強酒 15-0901〕元和十(八一五)年四四歳

清瘦詩成癖 清瘦 詩癖と成り

粗豪酒放狂 粗豪 酒狂を放にす

〔四十五 16-0952〕元和十一(八一六)年四五歳

妻兒不問唯耽酒 妻兒は問はず 唯酒に耽るを

冠帶皆慵只抱琴 冠帶皆慵にして 只だ琴を抱く

〔詠懷 16-0970〕元和十二(八一七)年四五歳

憂方知酒聖 憂へては方に 酒の聖なるを知り

貧始覺錢神 貧にして始めて 錢の神なるを覺る

〔江南謫居 17-1008〕元和十二(八一七)年四五歳

こうした胸中の懊悩を解くために酒を飲んでいる内に新しい素材として卯酒・提壺鳥を自己の詩に取り入れたのであろう。江州謫居時における詩創作意欲の高揚、飲酒詩の増大については今後考えて行きたい。

こうした飲酒詩が詠まれた一方で、江州の銘酒、佳肴に満足しているものもある。

緑蟻杯香嫩 緑蟻 杯香嫩たり

紅絲繪縷肥 紅絲 繪縷肥えたり

白楽天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

故園無此味 故園 此の味あじはひ無し

何必苦思歸 何ぞ必ずしも 苦ねんごろに帰るを思はん

〔春末夏初、間「遊江郭」二首（其二）16-0935〕元和十一（八一六）年四五歳

概して、左遷直後の詩は憤懣を酒にぶつけるような飲みっぷりであるが、次第にそれも収まって酒を楽しむ飲み方に徐々に移っていったように感じられる。

飲酒詩の大先輩であり、廬山ゆかりの陶淵明は

但恨在世時 但だ恨むるらくは 世に在りし時

飲酒不得足 酒を飲むに足るを得ざりしことを

〔（擬）挽歌詩〕卷四

と謳っているが、白樂天は飲酒にことかくことは無かったようである。白樂天は名のみで実際の職務の無い司馬とはいえ、俸給もあり、廬山に草堂を構えることができるほど裕福であり、飲み代を心配するどころか地方官として招かれての豪遊もしばしばあったようだ。こうしたところにも両者の飲酒詩、文学には違いがあるう。

### 結び

白詩の提壺鳥をめぐる考察を加えてきたが、総じて中国の例はくだけた場で詠まれており、白詩の雰囲気は忠実に守っている。平安朝の漢詩は二例までが晴れの場での詠であり、やや作爲的というか作った詩という印象を持つ。また諧謔味のある白詩語を上手く詠み込み、鑑賞者の興味をそそったり、知識をひけらかすという面もうかがえる。

白詩が後代の詩にも多くの影響を与えているが、一つの白詩語が宋詩と平安朝漢詩にも見られる場合、白詩と両者の関係、宋詩と平安朝漢詩で受容の仕方にどのような差異があるか等を今後も検討していきたい。

注

『林和靖先生集』に見られる白詩に關係するものとしては、次のようなものがある。

(一) 詩筒 樂天早與微之唱和

常以竹筒貯詩往還

樂天早に微之と唱和するに、常に竹筒を以て詩を貯え往還す。(卷一)

ここに詠まれた詩筒は林の自注も示す如く、白詩の

「與微之唱和。來去常以竹筒貯詩。陳協律美而成篇。因以此答53-2340」

に拠ったものであることは明らかである。林詩中に詩筒は他にも

若念故人兼久病 若し故人の兼ねて久しく病むを念へば

公餘無惜寄詩筒 公余に詩筒を寄するを惜しむこと無かれ

〔寄呈張元禮〕卷二)

と詠まれている。これも前掲の例や白詩に頻出する

「醉封詩筒寄微之53-2323」(詩題)

忙多對酒榼 忙多くして 酒榼しゅかふに對し

興少閱詩筒 興少くして 詩筒しじゆんを閱す

此在杭州。兩浙唱和詩贈答。於筒中遞來往。

〔秋寄微之〕十二韻 54-2427〕

などに拠ったものであろう。なお、詩筒の故事は『唐語林』も白詩の例を挙げている。

(二)

此魔降不得 此の魔 降すことを得ず

珍重五天人 珍重ちんじゆうす 五天の人

(贈張繪秘教九題・詩魔) (卷一)

この詩魔の語も、白詩の「閑吟 16-1004」

唯有詩魔降未得 唯だ詩魔のみ有りて 降すことを未だ得ず

每逢風月一閑吟 風月に逢ふ毎ごとに 一たび閑吟す

を意識したものであることは明らかであらう。この語が、白樂天の仲間うちで使った気軽な語であったことについては新聞一美氏の考察がある(「白居

白樂天の「提壺鳥」の詩と平安朝漢詩

易の詩人意識と『菅家文草』『古今序』―詩魔・詩仙・和歌ノ仙―『和漢比較文学』第十七号。

なお、この「贈張繪秘教九題」に登場する「九題」の内、「詩家」「詩狂」「詩牌」の語も白詩に縁の深い語である。

(三)

千兵款戸迂紅旆 千兵戸を款たきて 紅旆を迂まげ  
四壁留題拂紫苔 四壁題を留めて 紫苔を払ふ

〔和〕王給事同諸宦留題上〔卷四〕

この詩の「留題拂紫苔」は白詩の有名な「林間暖酒燒紅葉 石上題詩掃綠苔」(「送王十八歸山、寄題仙遊寺」14-0715)を意識したものであろう。

(四)

元和舊文體 元和の旧文體  
當許繼清塵 當に清塵を繼つぐを許すべし

〔寄〕錢紫微〔卷一〕

元和の旧文體とは元和年間に活躍した白楽天、元稹の詩風のことであり、この詩からも林の白詩に対する積極的な評価が窺われる。

(五)

白公睡閣幽如畫 白公睡閣 幽にして画の如く  
張祐詩牌妙入神 張祐詩牌 妙にして神に入る

〔孤山寺〕〔卷二〕

ここにも詩の中に眠る事を多く詠みこんだ白公、白楽天への慕情が読み取れる。

以上の諸例から考えて林和靖は白詩を熟読し、強く意識して詩を詠じており、提壺鳥の語も白詩から学んだものと考えられる。林詩における白詩語については、締め切り直前に気づき、先学の考察を調査する十分な余裕が無く、気づくままに列挙した。

二人の詩人は詩酒は当然のことながら、ともに鶴を愛しており、生き方にも似通う所がある。二人の文学、人生については今後考えて行きたい。

私事に互ることで恐縮であるが、一九九六年三月、長年の夢かかって訪中を果たした。春雨にけふる杭州は西湖を手漕ぎ船で遊覧後、湖畔の孤山に登り、林和靖ゆかりの放鶴亭や「林和靖処士之墓」を訪れた。空濛とした景色の中、西湖ゆかりの白楽天、林和靖、蘇東坡を心ゆくまで偲ぶことができた。一年半後、異国の学びやで彼らに関する論文を書くとは夢想だにせぬことであった。